

# かぞくのはなし きむら あきこ

## 第一話 手元のジェノグラム

### その 1

団士郎先生の、「家族理解ワークショップ」で、家族の学びを始めて、10年以上が経ちました。ワークショップのプログラムには、ジェノグラム面接演習というメニューがあります。二人一組で、インタビューをする人、される人、或いは、三人一組で、インタビューする人、される人、面接を観察する人というような形で、ジェノグラムを使った面接の演習をします。

「ジェノグラム」というのは、三世代以上を盛り込んだ家族の関係図です。このジェノグラムを使った面接が、想像以上に、家族を理解するための道具になっているのです。相談援助職としては、是非ともジェノグラム面接の腕を磨きたいと感じます。日々、相談援助の現場でジェノグラム面接を行っていますが、ワークショップでの演習は、また新たな発見に出会います。それは、インタビューをするという役だけではなく、インタビューを受ける、という役割を体験するからです。言ってみれば、被援助者体験を通して援助者を観察する機会でもあるからでしょう。

先日、これまでのワークショップの中で経験したジェノグラム面接の記録を振り返ってみました。そこには、10年前の私のジェノグラムがあります。どなたかが私にインタビューをしながら、私のジェノグラムやエピソードを描いて（書いて）くれたものです。このようなジェノグラムが、10枚ほどありました。ワークショップは10回以上参加していますし、面接演習も10回以上経験しています。それでも、手元に残っていたのは、10枚ほどのジェノグラムでした。戻らなかったものや、もしかすると、私自身が無くしてしまったものもあるでしょう。残った10枚のジェノグラムには、今よりも若い私と家族が存在しています。聴き手によって残された、「当時の私と家族」の記録がそこにあるので

す。今回は、手元のジェノグラムを使って、面接を受ける側（被援助者側）から、ジェノグラムとジェノグラム面接を振り返ってみたいと思います。

## ジェノグラム面接 演習のモヤモヤ

「では、ご家族のことを教えてください。」

面接者（いわゆる援助者の立場）の最初のセリフです。面接を受ける私（いわゆる被援助者の立場）は、どこから話そうかな、と一瞬頭の中の整理をしましたが、次のように答えました。

「今は、一人で暮らしています。離れています、息子が一人と娘が二人います。」

面接者は、手元の紙の上に、○や□（性別を表す記号）を記入しようとして、その手を止めました。私の顔を見て、「ええと・・・旦那さんは・・・離婚ですか？」と聞き返しました。

一瞬たじろぐ私。そして、「離婚・・・しました。」と答えながら、心の中が、ざわざわしました。私の心のざわざわとは関係なく、面接者は、○と□と家族メンバーを結ぶ線、夫婦をつなぐ線に、斜めの斜線をササッと二本描きました。

その後も、インタビューは続きます。前半8分、後半15分の面接。ずっと残る、私のざわざわ感。面接が終了した時に、なんとも言い難い疲れと不快な気持ちが残ってしまいました。

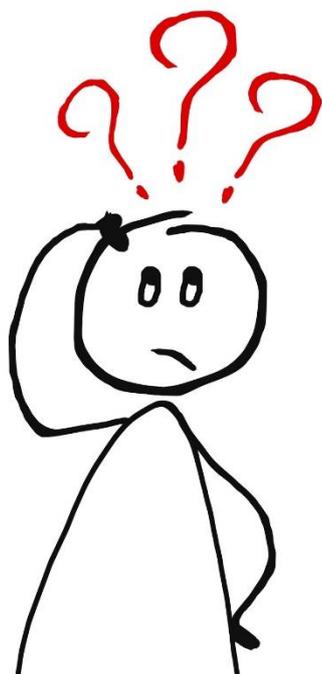
互いの役割を終え、面接についてのフィードバックです。私は、自分の身に起こっているざわざわ感を言葉にしてみました。

「私が最初に家族メンバーを伝えた後、夫が紹介されないことについて、『離婚したのですか。』という直球質問は、きつかったです。離婚について、隠すつもりはありませんでした。でも、自分以外の人から『離婚したのですか。』という直球質問は、なんだかしんどかったです。」率直な感想を伝えました。

面接者は、「ごめんなさい。では、なんと質問したら良かったのでしょうか。」と私に問いかけました。

家族の紹介をしてもらった時に、当然、登場しても良いはずの家族メンバーが紹介されなかった時（私の場合には、子どもたちの父親の存在）、面接者はそこに疑問を持つでしょうし、疑問を持ったまま面接を進めても、何か面接者は落ち着かないままかもしれません。先の面接開始場面では、どのような問いかけをされれば、私は穏やかに答えられたのでしょうか。

「今は、一人で暮らしています。離れています。息子が一人と娘が二人います。」



① 今は・・・と言うと、その前は、どのような感じでしたか？

② お子さんたちの、お父さんはどうされていますか？

③ 息子さんや娘さんは、お幾つですか？いつ頃から、離れたのですか。

④ お一人暮らしは、いかがですか？

他にも、質問フレーズは考えられますが、上記のような質問をされると、たぶん、②や④あたりの質問で、私は、自分が過去に離婚をしたことで、子どもたちの父親のことを語らなかつたという事実を伝えるのではないかと、思います。

私は、このジェノグラム面接演習の時には、自分のことをできるだけ正直に話したいと思っています。「離婚」という自分の身に起こった出来事も、隠すつもりはありません。でも、家族紹介に夫（子の父親）が登場しない理由は離婚に限ったことではないのです。様々な理由があるはずなのに、ピンポイントに「離婚ですか。」という質問に、「はい！大正解！！！」とはならないのです。（クイズじゃないのだから・・・）

当然ながら、面接者に悪気はないのは理解しています。私は、被援助者体験を通して、質問フレーズは丁寧に生み出す必要があると感じました。そして、語りだした人が、どのような言葉を使っているかに心を寄せて聴くことができ

ると、相手が何を語るのか、語りたいのか、面接者は謙虚になれるのではないかと思うのです。

ジェノグラム面接の演習では、現実の相談面接とは違い、被援助者役が、必ずしも、課題や悩みを抱えているわけではありません。ですから、困りごとを語りだす、というわけではないのです。面接者は、できるだけニュートラルな気持ちで相手の語りに心を寄せることが大切です。実際の相談面接の場合では、困りごとを抱えた来談者が、主訴という名の困りごとを面接場面で語ろうとします。けれども、その主訴は一旦横に預けておいて、「ご家族のことを教えてください。」という声掛けをすると、「家族」を入り口に、家族に起こった情報や思いが語られます。事実の一つでも、事実の語り方は一つではありません。事実をどのように語るのかは、語り手が選択できますが、そもそも、聴き手が、語りを受け取ろうとする姿勢がないと、語り手は語りたくもありません。

私が、私の「今」について、あるいは「家族」について語りたかったのは、離婚の話ではありませんでした。面接において、訊きたいことと語りたいことにズレが生まれると、援助者が被援助者に対する理解にたどり着くことは難しいかもしれません。（被援助者は、訊かれないのではなく、聴いて欲しい。）援助者視点では、ともすると「情報」収集に重きがおかれてしまうことがあります。事実情報は、尋ねられれば簡単に答えることができますが、事実に関する「事情」や「思い」については、尋ねられ方によって、答え方も変わってきます。それは、単純に、「質問力」という括りではないような気がします。

「今は、一人で暮らしています。離れています。息子が一人と娘が二人います。」

この語りだして、私が続けて話したかったことは、子ども達が成長して、一安心したことや、私自身も一人暮らしが板についてきたところで、ようやく自分の人生を生きている実感を得て毎日過ごしている、ということでした。手元のジェノグラムには、三世代が盛り込まれた私の家族情報がしっかりと描かれていました。けれども、私が語りたかったことや家族の特徴が浮かび上がったものではありませんでした。「聴いてもらえた。」と実感する面接ができるようになるためには、やはり練習が必要です。この時の面接演習は、心にモヤモヤしたものが残りましたが、その経験があったからこそ、実際の相談面接の場面では、聴き方に留意することを特に意識できるようになったのは大きな収穫でした。

おわり